

時代を 読む

渡辺 利夫



一月ほど前の日曜日、神田の古書店で早川庄八著『律令国家』（小学館、一九七四年）を目にとめ、買い求めた。引き込まれて二冊目までを讀了した。

氏によれば、律令国家は日本で初めて成立した「制度国家」であり、今日からみても驚くほど密度の濃い制度的ネットワークを張りつめた国家だったという。「そういう国家の類例を日本史にさがすとすれば、それはたぶん、明治維新のうちに形成された近代国家しかないであろう。国家のしくみに目をむけるかぎ

り、日本古代の律令国家は、中世を通りこして、近代国家に似ていると氏は指摘する。逆

実である。大陸で隋王朝が成立して高句麗に遠征、以来、朝鮮半島が極東アジア動乱の

たが、白村江の海を血で染めて敗退（六六二年）。その後、唐と新羅が対立し、新羅が唐を遼東に後退させ、新羅による半島統一が成った。この間、唐と新羅は日本を自陣営に引き込むべく、使者を何度も遣わしてきた。

白村江の戦いの後、強固なユーラシアの大国、清国とロシアが朝鮮半島を伝わって作り出す「等圧線」に抗して形作られたものが、天皇を中心

に据えた帝国明治である。これを古代律令制国家と「相似形」だと見立てた早川氏の着想は秀逸である。

古代史の「空白」を埋めよ

に言えば、日本に国家が存在したのは律令国家と明治維新に淵源をもつ近代国家のみであり、その二つに挟まれた時代、日本には国家は存在しなかったというところになる。

舞台となった。高句麗遠征が失敗し、隋が滅んで唐王朝が成立しても、朝鮮半島への軍事的圧迫は変わらなかった。高句麗は百済と組み、唐と結び新羅と対立。唐を後ろ盾にした新羅は高句麗・百済連合を追いつめた。百済の要請に

舞台となった。高句麗遠征が失敗し、隋が滅んで唐王朝が成立しても、朝鮮半島への軍事的圧迫は変わらなかった。高句麗は百済と組み、唐と結び新羅と対立。唐を後ろ盾にした新羅は高句麗・百済連合を追いつめた。百済の要請に

国家建設に乗り出さねば、極東アジアで生存をまっとうできないと認識した文武天皇によって、中国から導入されたものが律令制度である。これによって天皇を中心とした中央集権的な統一国家が成立し、以来、日本の律令国家は二百年にわたって持続した。

『古事記』が編まれたのは七二二年、『日本書紀』は七二〇年である。律令国家が完成期にいたり、天皇を中心とした国家形成のありようを記すべしとする機運が高まって生まれたものが、この日本最古の正統的史書である。極度に強い政治・軍事的圧力の中に身を置きながら、統一国家として屹然と極東アジアに君臨した古代国家日本の生きて在った証しが「記紀」である。慚愧に堪えないのは、戦前

期歴史学の一大権威、津田左

右吉氏によって「記紀」は天皇支配を正当化するために「造作」された神話であり、史的根拠の薄いものだと断定されたことである。戦後の左翼史観の跳梁の中にあつて、津田氏の断定は多くの歴史家によって継承され、今日なお、古代史は血の通った人間によって紡がれた歴史としてわれわれの前に姿を現していない。

大平裕氏による『日本古代史 正解』（講談社、二〇〇九年一月）は、みずからの徹底的な実証研究によって、日本の古代史学者の傲慢を糾弾した入魂の著作である。「記紀」に表れる古代史を切り捨て、なお古代史を「空白」のままに残して恥じることなき学界の知的不誠実を衝いて、同書は余すところがない。

（拓殖大学学長）